

相馬市善光寺遺跡出土の礫石経について

—まほろん収蔵資料の再紹介—

笠井 崇吉

1 はじめに

現在、福島県文化財センター白河館（以下、まほろん）の収蔵庫には、遺物収納コンテナ（サンコー・サンボックス#32）に換算して5万箱弱の資料が収蔵されている。それらは、福島県教育委員会及び財団法人福島県文化センター（現公益財団法人福島県文化振興財団）が発掘調査を実施した遺跡からの出土品であり、その主だったものは福島県文化財調査報告書に掲載されて、各分野の研究者に周知され歴史研究の基礎資料となっている。ところが、資料的価値が高く報告書に掲載されているにもかかわらず、研究者に取り上げられることもなく、収蔵庫の片隅で埃を被って忘れられている気の毒な資料がある。今回取り上げる資料はそのような資料の内の一つである。

善光寺遺跡は、福島県北東部の相馬市塙部字善光寺に所在し、国道113号バイパスの建設工事にともなって昭和62年から63年にかけて発掘調査された遺跡である。福島県では数少ない7世紀の須恵器窯跡群として著名であるが、中世～近世にかけての経塚や集石墓、墳墓群が存在したことはあまり知られていない。

今回紹介する礫石経は、先述の集石墓およびその周辺から出土したもので、当該報告書^(註1)の写真図版157に掲載されている5点であるが、墨書が経石の複数面にわたる資料があるものの、一面のみの掲載で終わっていることから、新たに実測図と写真を付加して研究者の検証可能な資料化を図った。なお、墨書・経文の判読は、礫石経の評価に重要な要素であり、本稿執筆にあたり検討したが筆者の力不足もあり経文の断定に至らなかった。このため、本稿においては釈文の記載は見送り、文献史・仏教史の専門諸兄の今後の研究にゆだねることとし、遺物の考古学的なアプローチのみからの考察でお許しいただきたい。

2 出土経石の観察

まほろんに収蔵されている善光寺遺跡出土の礫石経は先述したように5点あり、報告書では、各資料を識別できる図・枝番号が付されていないため、便宜的に1号集石墓出土資料を経石1、2号集石墓出土資料を経石2～4、表土出土資料を経石5とし（図1・2、口絵3～5）、以下各経石の特徴を列記する。

経石1（図1、口絵3） 長さ13.9cm、幅8.6cm、厚さ4.5cmを測る平たい硬質砂岩の円礫を使用しており、平坦な一面に墨書が認められる。報告書でも指摘されているように、左端の行に「南無阿囗陀仏」と読めることから、この部分の不明な文字については「弥」で間違いないものと思われる。「南無阿弥陀仏」の右側には2行分の墨痕が認められ、最も右側の行の最下部の文字が「年」である可能性があるが、赤外線写真でも判然としない。墨書文字の大きさは1.2～2cm程度で、5点の資料中では大きい部類である。特に傾きは認められない。

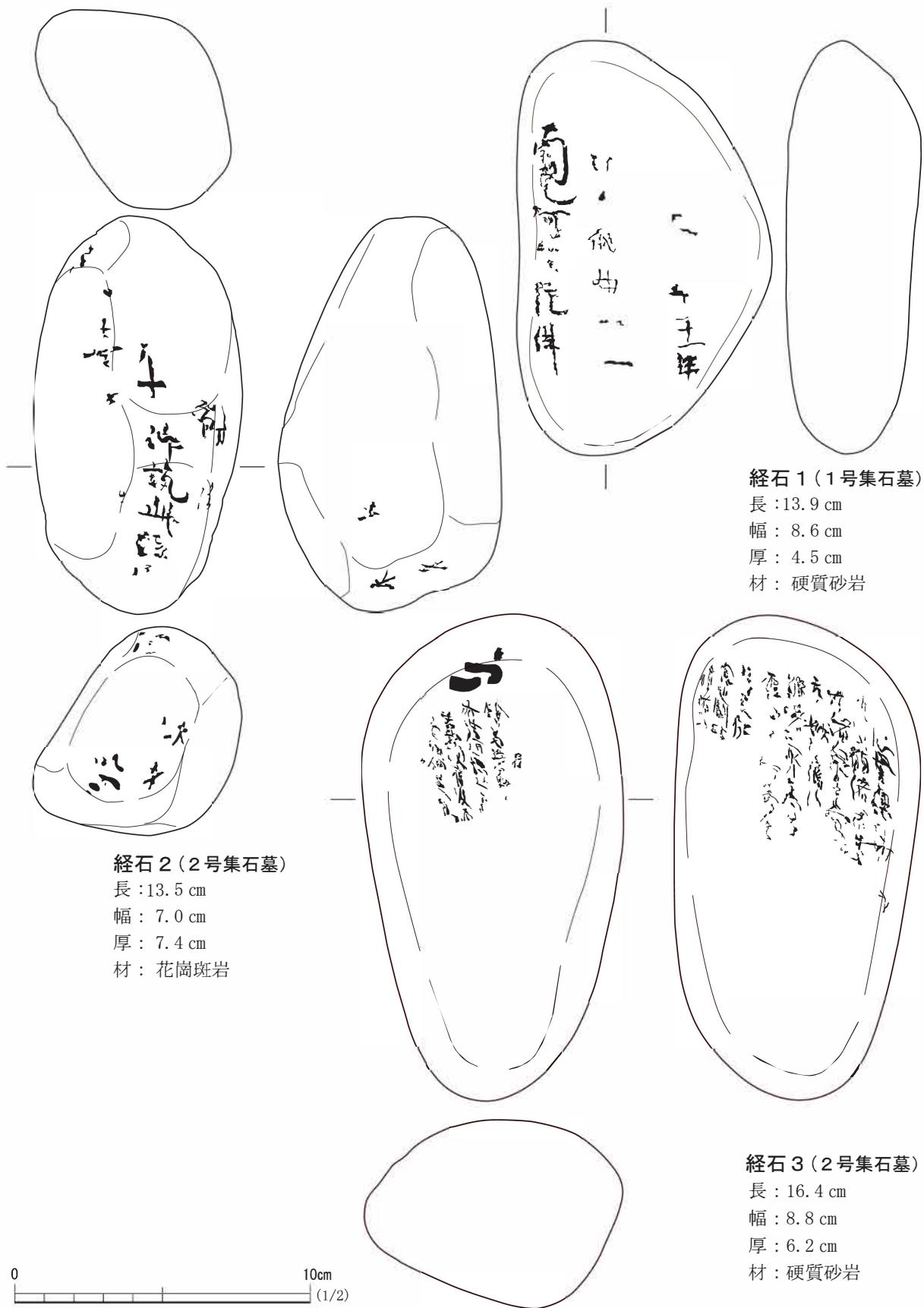


図1 経石1～3実測図

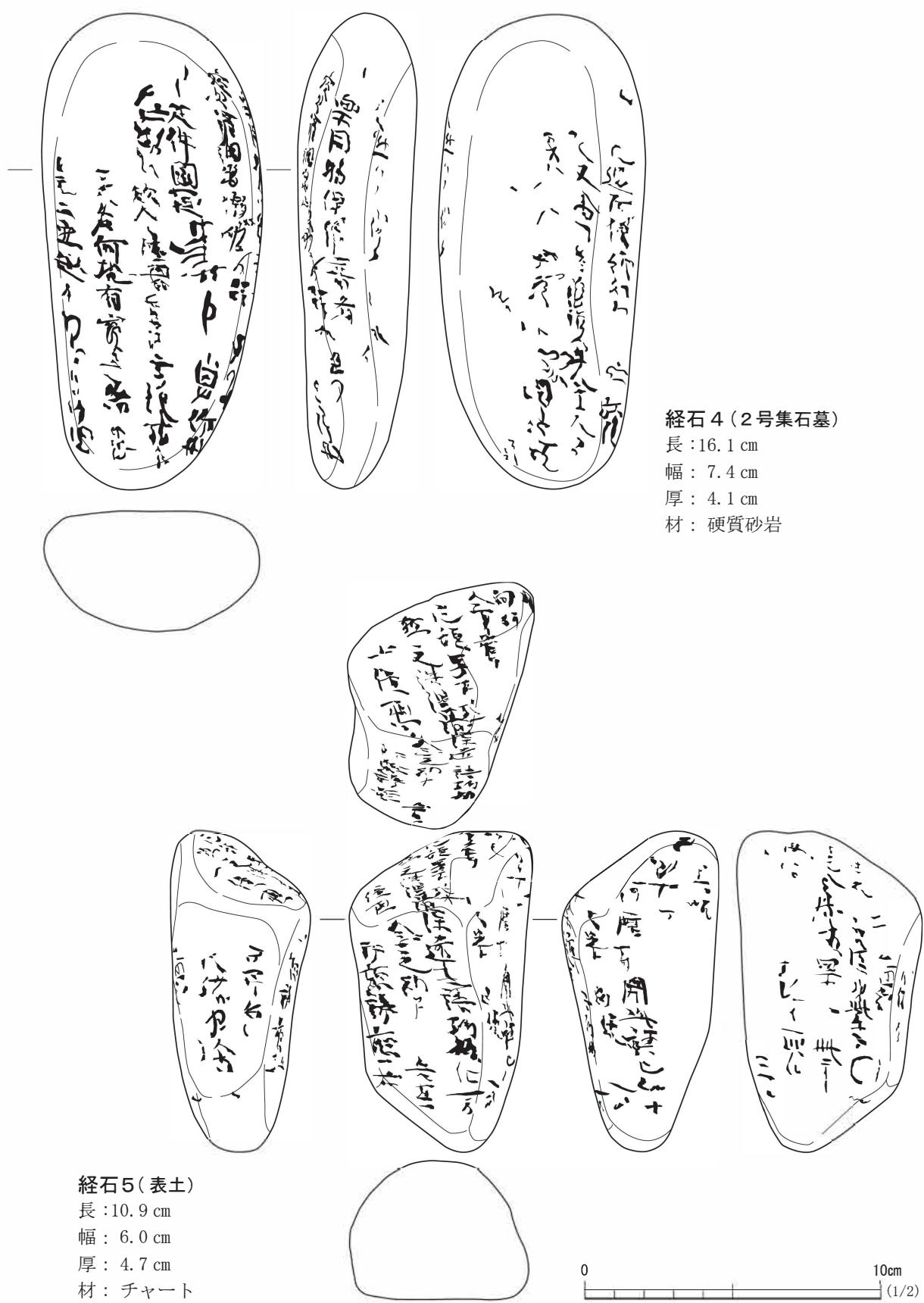


図2 経石4・5実測図

経石2（図1、口絵3） 長さ13.5cm、幅7.0cm、厚さ7.4cmを測るサツマイモ状の細長い花崗斑岩の円礫を使用している。墨書は礫の全面にわたり書かれていた可能性があるが、現況では稜の部分とその左右の狭い平坦な面や両端部に認められるのみである。稜の部分の中央から下部にかけて「□□佛訖此□□」、その右隣の行に「糸」と読める墨書が認められるが、判読できた文字数が少ないため、墨書された内容が経文なのか願文なのか断定できない。文字の大きさは、1.2～1.5cm程で、経石1同様際だった傾きは認められない。

経石3（図1、口絵4） 長さ16.4cm、幅8.8cm、厚さ6.2cmを測る一面が平坦で、細長く厚みのある硬質砂岩の円礫を使用している。墨書は平坦な面に9行、その裏側の緩やかな曲面に5行分が確認でき、礫の上半部に偏って遺存する。文字は細い筆で書かれた6～8mm程の小さなもので、右下がりに傾いて書かれる特徴がある。これらの墨書は、「興」「亦」「光」と読めそうな文字も散見するが、編・旁等の部首を省略して書かれているふしがあり、梵字も含まれている可能性がある。曲面側の文字列の上には、梵字の一部と推定される太い墨痕が認められ位置関係から仏を表す種子である可能性が高い。

経石4（図2、口絵4） 長さ16.1cm、幅7.4cm、厚さ4.1cmを測る細長く平たい硬質砂岩の円礫を使用している。墨書は平坦な両面と平坦面に挟まれた一側面に連続的に書かれている。文章が連続していることから、経文である可能性が高いが、その内容については解読できていない。図中左の面では5行分が認められ、「寶濟□□□□…」、「□定件□□…」、「…欲何□有□…」と読める部分がある。その右側面には2行分あり、「…樂日□…」と読める部分がある。背面では右側に寄った部分に3行分が認められ、「命」と判読できそうな文字もあるが全体的に墨書の遺存状態が悪い。経石4の文字の大きさは1.0～1.2cm程でやや右下がりに傾いている。

経石5（図2、口絵5） 長さ10.9cm、幅6.0cm、厚さ4.7cmを測る短い角柱状のチャートの円礫を使用している。礫には6面あり、下面を除く5面に墨書が認められる。文字は図中右側面から書き始められているようで、右側面の右上に梵字の種子と見られる大きな墨痕が認められる。これに続けて、13行にわたる文字列が上面・右側面→上面・正面→左側面→裏面の順に書かれているようである。現時点での判読できる文字を列記すると、「阿□□□薩□門此□□□」、「人予□…」、「正□□□…」、「萬之□□骨保□□語□好□」、「□□□合道約…□貴□」となるが、判読できる文字数が少ないため、墨書が経文なのか願文なのか判然としない。経石5の文字の大きさは0.8～1.0cm程で、経石3同様にやや右下がりに傾いており、部首の省略も認められるようである。

以上が善光寺遺跡出土礫石経の観察状況である。経石を概観すると、いずれの礫も水磨された痕跡が認められることから河原石と判断でき、遺跡が位置する丘陵南側の地蔵川や北側の立田川から採取されたものと考えられる。礫の大きさは、10cm以上20cm以下で、礫石経としては比較的大きな礫が使用されている。墨書については、経石1が20文字程度、3が60文字以上、経石4が70文字程度、経石5が80文字程度の文字数と推定され、文字数が比較的多い多字一石経であると指摘できる。

3 経石出土遺構と出土状況の検討

次に、善光寺遺跡出土経石の出土状況とその伴う遺構について検討する。報告書によると、出土経石の内、経石1は1号集石墓、経石2～4は2号集石墓から出土したことが報告されている。善光寺遺跡において、集石墓は遺跡が立地する東西方向に細長く延びる丘陵の南側斜面中位に造成された小規模な平場に構築され、1・2号集石墓については、10m以内の距離で並んでいる（図3）。集石墓を構成する礫は、経石同様に遺跡近くの河川から搬入されたと推定される河原石である。以下遺構ごとに検討していく。

1号集石墓（図3、口絵6） 東西4m、南北1.8mの不定形な範囲に拳大～幼児頭大の円礫が集められた遺構で、図中では300点程の礫で構成されている。礫の集合状況は遺構の東部と西部に偏在する傾向がある。東部の礫群は、東西2m、南北1mの範囲にまとまっており、南端中央付近から、口絵5に示した骨蔵器の須恵器壺が正位の状態で出土している。骨蔵器と礫群の間には幅20～30cmの空間が認められ、骨蔵器の内外には骨片が確認されている。骨蔵器のすぐ南側には礫群が認められないが、地形的要因から斜面下方へこの部分の礫が流出して失われた可能性が高く、本来は骨蔵器を中心に直径2m程の円形の集石遺構であったと推定される。同様に西部の礫群は、東西2m、南北2mのC字状の範囲にまとまっており、中心部分に河原石とは異質な軟質凝灰岩片が散在していた。報告書によると、この凝灰岩片は墓標破片とされており、3号集石墓出土の五輪塔の空輪（口絵5）も同様の石材で作られていることから、仏教的な地上標識の破片であった可能性が高いものと考えられる。そうであるならば、西部の礫群も地上標識を中心に直径2m強の規模をもつ円形の集石遺構と推定され、テラス状の平坦地に2基の円形集石遺構が東西方向に並ぶ情景が復元できる。経石1は報告書では出土位置が断定できなかったが、図3の★印に示すように、地上標識の根本付近の下部から出土していたことが、遺構実測図から判明しており、礫石經埋納の状況を考える上で興味深い。なお、本遺構の表土層からは中世の古瀬戸片が出土している。

2号集石墓（図3、口絵6） 東西1.5m、南北4.6mの不定形な範囲に拳大～幼児頭大の円礫が集められた遺構で、図中では320点程の礫で構成されている。礫群の間には骨片が散在し、軟質凝灰岩片も認められることから、1号集石遺構同様に地上標識が存在した可能性がある。礫の集合状況は、図3の破線で示すように、南北方向に並んで4箇所、やや北西に離れた地点に1箇所の計5箇所に集中部が認められる。個々の集中部は直径・一边が1～2mで、南北方向に方形と円形の集石遺構が並ぶ情景が復元できる。報告書によると、経石は2点が集石の下部より出土したとされているのみであり、それが経石2～3のどれに該当するのかは不明である。遺構実測図も調べたが、経石の出土状況は不明である。

以上が経石の出土が報告されている遺構であるが、集石墓については、2号集石墓の北西25mの斜面上位に幼児頭大の円礫と骨片が散布する3号集石墓があり、ここからは先述したように五輪塔の空輪が出土している。さらに、集石墓同様に河原石が伴う遺構には14世紀の印花紋灰釉陶器瓶子（図3）や経筒の一部とみられる板状鉄製品が出土した1号経塚がある。

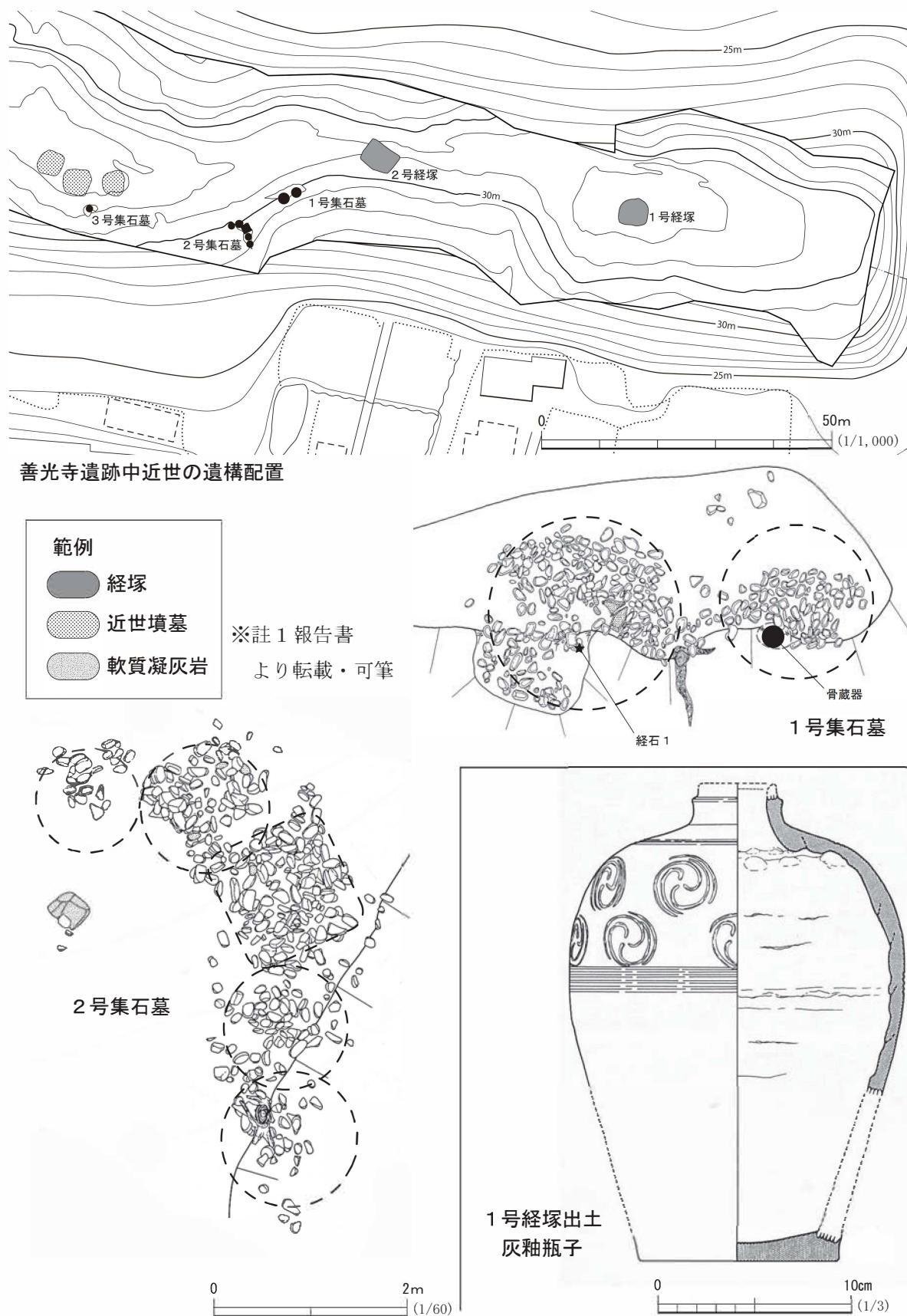


図3 遺構配置図、1・2号集石墓、經塚出土遺物

経石5については、表土と表記されただけで、出土地点のグリッド等の記載は付されていないが、報告書の調査経過に「盆明けの19日には、集石墓付近から礫石経1点が出土した。」との記載があり、他の経石は出土遺構が明確であることから、文中の「礫石経」とは経石5であると断定できる。よって、経石5は1~3号いずれかの集石墓に伴っていたものと推定される。

4 まとめ

善光寺遺跡出土経石と経石出土遺構について述べてきたが、これらの遺物・遺構がどのような特質があり、福島県の歴史研究にとってどのような意味をもつのか考えてみたい。

まず、経石についてであるが、善光寺遺跡出土経石はすべて多字一石経であり、書かれた文字数が推定で20~80文字程度である。また10cm以上の河原石を経石の素材としており、出土点数が極めて少ないという特徴がある。福島県内の多字一石経出土例としては、会津坂下町中目経塚^(註2)、会津美里町福生寺観音堂遺跡^(註3)、湯川村常法寺経塚^(註4)、磐梯町慧日寺伝徳一廟^(註5)、須賀川市糲山遺跡^(註6)、新地町向田経塚^(註7)、同町師山遺跡^(註8)等が上げられるが、伝徳一廟例を除く資料には一字一石経が伴い^(註9)、数量としては一字一石経が主体で出土経石数も善光寺遺跡出土資料よりもはるかに多い^(註10)。経石の大きさも10cm以下の資料が多く、文字数も10文字以内のものが大半であり、中目経塚例・福生寺観音堂遺跡例・伝徳一廟例以外の資料は一字一石経の範疇で理解した方が良いものと考えられ、中目経塚例・福生寺観音堂遺跡例・糲山遺跡例以外は中世末~近世の所産であると報告されている。なお、中目経塚出土の多字一石経には、天文13(1544)年の経塚造立年が記載されたものがあり、福島県内で年号が記された経石としては最古の例である。県外の資料であるが、弘安6(1283)年の紀年銘をもつ宮城県利府町道安寺出土例^(註11)や応長元(1311)年の紀年銘を持つ山形県天童市高野坊遺跡出土例^(註12)に見られるように、「中世段階では、概ね成人男子の拳大ほどの一石に複数行、または複数字の長行・偈頌を書写する多字経石の例が目に付く」との指摘^(註13)や鎌倉時代の書風とされる岩手県盛岡市宿田南経塚例^(註14)と経石3の字体の類似性^(註15)は善光寺遺跡出土経石が中世的な特徴をもつ傍証になろう^(註16)。

次に遺構であるが、1・2号集石墓の検討から、丘陵南斜面に開析された広い谷頭の西端にL字形の平坦地が造成され、そこに骨蔵器や軟質凝灰岩製の標識を中心とした円形・方形の礫石経塚が並ぶ状況が想定できる。先述した県内の礫石経出土遺跡での経石出土状況は、中目経塚・向田経塚・師山遺跡では塚の上に散布する状態、糲山遺跡では塚下の土坑内、福生寺観音堂遺跡では堂下の土坑内、伝徳一廟では塔基壇内、常法寺経塚では地蔵下の石製経箱内で、類例が認められない。県外の例では、宮城県東松島市矢本横穴群76号墓^(註17)の状況が興味深い。同墓は古墳時代の横穴墓を再利用したもので、逆位の常滑大甕の中に長さ10cmの河原石に法華経の題目32本を細かい字で墨書きした多字経石1点を収め、周囲を人頭大の河原石で被っている。礫の散布範囲は東西2m、東西1.8mで礫間からは骨片も出土しており、善光寺遺跡1・2号集石墓の検出と類似点が多い。

善光寺遺跡の経石と集石墓の年代については、経石のまとめで触れたように、中世にさかの

ぼる可能性が高い。1号集石墓の骨蔵器は、回転ナデにより仕上げられ、胴部下半にヘラケズリが認められるもので、色調はやや赤みがかかった中世的な印象を受けるが、製作技法的には古代的であることから少なくとも中世以前の所産であろう。また、報告書には、1号集石墓の上層から古瀬戸片が出土しているとの記載があり、これが、丘陵頂部の1号経塚出土灰釉瓶子と同時代のものであれば14世紀の所産であると想定できる。類似点の多い矢本横穴墓76号墓が13世紀後半の所産とされているので、善光寺遺跡の礫石経はこれに近い年代の所産ではなかろうか。そうであるなら、本資料は県内最古の礫石経資料である可能性がある。

最後に、集石墓の営まれた場についてであるが、善光寺遺跡の所在する場所は、大字が塚部であることから、経塚の存在が古くから意識されていたのである。また、小字名が中世を代表する信濃の有名寺院と同名であり、西側には遊行僧を思わせる聖という地名も残る。近世に成立した相馬地方の地誌である『奥相志』^(註18)の塚部村の頁には「善光寺く中略古、寺あり。故に名づけしか。」とあり、近世には寺院が存在せず、存在したとすれば中世に遡る可能性を匂わせている。また相馬氏の歴史を伝える『東奥中村記』^(註19)の「兵部太輔隆胤并門馬上総討死之事」の註に「其頃ノ海道ハ今ノ道筋ヨリ東ニテ善光寺ト云フ所海道ナリシト云リ」と記載されていることから、善光寺の地は中世において幹線道路が通り、経塚や墓が点在する宗教的空间であった可能性が高い。そしてその南の山裾には、阿弥陀如来を中心とし、観音菩薩・勢至菩薩を脇侍とする本尊仏を安置する堂宇が存在したことを夢想して本稿を終える。

<註>

- (註1) 福島県教育委員会 1988 「善光寺遺跡」『国道113バイパス遺跡発掘調査報告IV』
- (註2) 中目経塚調査会 1976 「会津坂下町中目経塚」『福島考古第17号』
- (註3) 会津高田町教育委員会 1999 『福生寺観音堂遺跡－基壇と礫石経の調査－』
- (註4) 湯川村教育委員会 1982 『福島県湯川村 常法寺経塚』
- (註5) 磐梯町教育委員会 1983 『伝徳一廟保存修理工事報告』
- (註6) 福島県教育委員会 1978 『糲山遺跡』『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告II』
- (註7) 新地町教育委員会 1982 『向田経塚』『向田C・D遺跡 向田経塚』
- (註8) 福島県教育委員会 1978 『師山遺跡』『相馬開発関連遺跡調査報告II』
- (註9) 伝徳一廟出土例は、報告書掲載の10点がすべて多字一石経であるが、他に121点の経石が出土しているため、一字一石経が含まれている可能性がある。
- (註10) 一字一石経を含む出土経石の数は、中目経塚例(報告書掲載数)が214点、福生寺観音堂遺跡例が331点、常法寺経塚例が7,109点、伝徳一廟例が131点、糲山遺跡例が236点、向田経塚例が50点、師山遺跡例が28点で、善光寺遺跡の5点とは開きがある。
- (註11) 利府町教育委員会 1978 『菅谷道安寺横穴墓群』
- (註12) 天童市教育委員会 1997 『高野坊遺跡発掘調査報告』
- (註13) 川又隆央 2005 『宮城県の礫石経塚』『宮城考古学 7号』
- (註14) 盛岡市教育委員会 2010 『盛岡市内遺跡群 宿田南経塚』
- (註15) 前掲14で国際仏教学大学院大学の落合俊典教授のコメントとして、右肩下がりで、編・旁といった部首が大部分略される書風は鎌倉時代中期～後期の書風に相当すると述べられている。
- (註16) ただし多字一石経が多数出土した伝徳一廟出土例は、近世後期の所産であることから、多字多行の多字一石経をもって中世の所産と断定することはできない。
- (註17) 東松島市教育委員会 2008 『矢本横穴墓群I』
- (註18) 相馬市 1969 『相馬市史4 資料編1 (奥相志)』
- (註19) 泉田胤信 1897 『東奥中村記』